

書道楽しむ「書do!展」

図書館企画

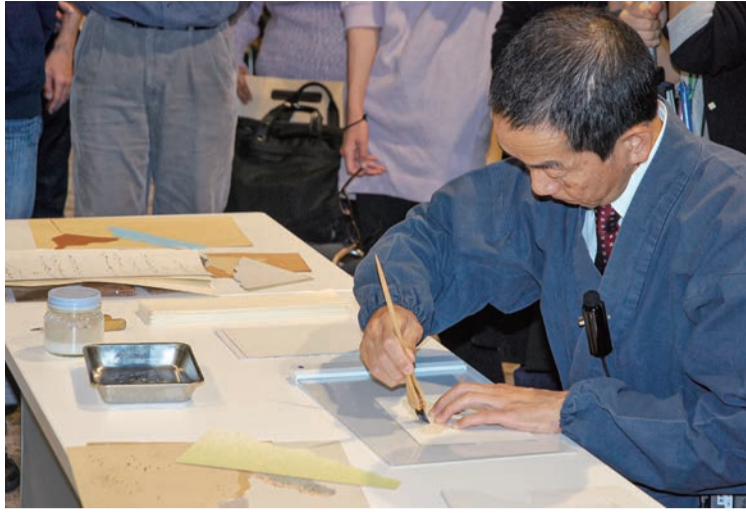
「千字文」書くコーナーも



鑑賞したり体験したりと、さまざまな角度から書道を楽しんだ「書do!展」

図書館秋の企画展「書do!展」が10月14日から11月3日まで、生田キャンパス9号館図書館研修室で開催された。本学が所蔵する書道に関する貴重資料など約30点を展示。実際に筆を執って書をしたためるコーナーもあり、訪れた人は書「do(二する)」をさまざまな角度から楽しんでいった。

古くから中国や日本で書の手本とされてきた「千字文」は特徴の異なる1点を展示。体験コーナーでは、学生らが4字を選んで真剣な表情で筆を走らせていた。展示に協力した松尾治文学部准教授(書道)らの現代書道作品や、書道に欠かせない文房四宝(筆・墨・硯・紙)も紹介された。学生らがしたためた千字文も展示紹介された。



かな料紙製作者・小室久さん

実演交え伝統技法紹介

10月28日には「書do!」展に関連する講演会が、生田キャンパス蒼翼の間で開かれた。学生や教職員、近隣の方々など約70人が参加した。講演者は、かな料紙製作者の小室久さん。茨城県常陸太田市に工房を構え、伝統的な技法で、染めから紙の継ぎまでのすべてを飾る実演する小室さん

の工程を手作業で行う。講演で小室さんは、持参した材料や道具を示しながら、かな料紙の工程を説明した。平安時代に誕生したかな文字の紙として加工・装飾されたものを料紙と呼び、現代でも書道でかな文字を書く際に使われる。草木染めなどで染色した和紙に、金・銀箔の砂子や雲母の粉などをちり

ばめる。そうやって作った複数の紙を切り貼りして張り合わせたりして、装飾を施すことで紙の料紙が完成する。小室さんは「かな料紙の製作は、染色、箔加工など分業で行っているところが多い。工房先々代の祖父は、これらの工程すべて一人で行うスタイルをとり、受け継いでいる」と語った。講演後に実演を行い、

直線状、雲の形や山、川の流線をイメージさせるさまざまな形にした料紙をつなぎ合わせ、美しい作品を次々と仕上げた。「伝統的な工法の料紙は、年月がたてばつぼみが出て書き心地がよい。料紙の美とともに書家の作品を支える料紙製作を、一般に広めていきたい」と語った。

参加した小島春奈さん(文2)は授業やサークルで書道に取り組んでいる。料紙は知っていたが、製作にこんなに手間がかかるものとは知らなかった。書道の奥深さを感じた」と話していた。

ドネシアを最重要拠点国としている。現地では都市型のモールを展開。ジャカルタなどに2店舗を置き、20年に3店舗目を点での販売姿勢が欠けていない。5店舗まで計画されている。

葉子社長は「流通・小売業がパワーを持つ日本市場とは異なり、インドネシア市場ではメーカーの力が強い。現地のほとんどの小売店は消費者視点での販売姿勢が欠けていて、また急成長するバイク便による商品デリバリーサービスを積極的に取り入れているほか、植樹をはじめ環境活動にも取り組んでいる」と話した。

会場からは、インドネシアにおける小売業とメーカーの関係、現地のプライベートブランド開発やインドネシア以外のアジア諸国における店舗展開など、海外流通市場に関する学生4人の後期課程の学生2人が研究を発表。大会後には総会・懇親会が行われた。

健太教授と同ゼミ生が協力。山田教授が取材を行う際のポイントや記事の書き方を指導し、ゼミ生8人が小学生たちの新聞製作を手伝った。当日の参加者は、川崎

川崎市の小学生が同市臨海部の企業を訪問し、新聞づくりを体験する催しが10月15日に行われた。川崎市が企画した初めての試みで、文学部ジャーナリズム学科の山田

経営学部「流通論」(目黒良門教授)の特別講義が10月23日、生田キャンパスで行われた。講師は、イオンインドネシアの菓子豊文社長。小売業の視点からインドネシアの市場や流通の実態、イオンインドネシアの取り組みを語り、学生約200人が聴き入った。

インドネシアは、2030年には人口3億人を超えると予想される成長著しい巨大市場で、国民の消費意欲も旺盛。イオンは海外事業の中でイン

小学生にアドバイスを送る山田教授(左)と数間萌季さん(文2)

緑鳳学会開催
本学出身の研究者らでつくる専修大学緑鳳学会(小杉伸次会長)の第28回大会が10月26日、神田キャンパスで開かれた。今大会の統一テーマは「渋沢栄一の歩んだ時代とその軌跡―令和の時代に示唆するもの―」。小杉会長や近江吉明文学部教授ら5人の研究者による研究報告やパネルディスカッションが行われた。「近代資本主義の父」と呼ばれる渋沢の業績と、現代社会に与えた影響について活発な意見が飛び交った。

文・山田ゼミ 小学生の新聞製作サポート



市内の小学1年生から6年生までの19人と保護者の計39人。一行は、川崎市本庁舎で山田教授からレクチャーを受けた後、バスで臨海部に移動、製鉄所や火力発電所の2カ所を見学。小学生たちは説明を聞いて熱心にメモを取り、撮影をした。その後、新聞づくりに向けた戦い。5班に分かれ、模造紙に記事を書き撮影した写真を貼り、約1時間で新聞一面を仕上げた。完成した5作品を張り出し、山田教授が論評。ナイスリポート賞、ビューティフル賞などを贈った。出来上がった新聞は縮小して印刷し、それぞれが持ち帰ったほか、市内の全小学校にも配られる。

参加者は「大学生のお姉さんたちが教えてくれたので楽しく新聞づくり

ができた」と話していた。山田ゼミの加藤夏衣さん(文2)は「小学生たちへの素直な感性が新鮮だった」と振り返った。

「た」と話す。また領五菜(文2)は「一人に教えることで自分も勉強になった」と振り返った。

質問があった。The Philosophy of No in the Classroom Before entering the classroom, I recommend saying no. This is not a refusal to learn, but rather the first step toward learning. It is a very specific kind of no, one inspired by a long dead thinker from France. In his book *The Philosophy of No* (La philosophie du non, 1968), Gaston Bachelard explains that received "wisdom" and "common sense" can block thought. He advocates saying no to "the 'truths' of the past, many of them deeply embedded in our subconscious minds" (Bachelard 1968: xii). I fear that too many young people in Japan have a similar, shared sense that they are unable to speak or express themselves in English. This sense is often shared despite years of compulsory English education and strong scores on placement exams. Until we can say no to this common sense of self and limitations, the path forward will remain blocked. Just say no. Try it and see. This no is not coming from a self-absorbed or overly confident sense of already knowing. It is saying no to what we think we know, which too often holds us back and weighs us down. It holds us in place. Saying no in this way is saying yes to a world and self full of untested potential. Bachelard, Gaston. 1968. *The Philosophy of No: A Philosophy of the New Scientific Mind*, G.C. Waterston (trans). New York: Orion Press.